◇太田の軍需産業終焉と新生日本の萌芽～そして現在へ　　大槻伸次

今年（2021 年）の NHK 大河ドラマは「青天を衝け」で、そろそろ終盤であるが、この大河ドラマのモデルとなった渋沢栄一は日本資本主義の父とも云われ、新一万円札の肖像にも採用される。その渋沢栄一の出身地は、太田市と利根川を隔てて接する埼玉県深谷市です。ところが、至近の群馬県太田市（旧尾島町出身）も、渋沢栄一に匹敵するであろう中島知久平という怪物を輩出している。〔中島飛行機設立（飛行機王ともいわれた）・立憲政友会総裁〕。

中島知久平は、早くから近代戦において飛行機の重要性に気づき、飛行機研究所を当時の新田郡太田町（現太田市の呑龍様東側）に創設した。そして中島飛行機を短期間に財閥系の三菱重工等に匹敵するであろう軍用飛行機会社に育てあげたのである。

そこで、太田は中島飛行機の拠点として日本全国各地から多くの研究者や労働者、青年学徒たちが来太し、呑龍様下の小さな門前町（例幣使街道の宿場町でもあった。）だった太田は人口も膨れ上り、一時 30 万都市「新田市」構想もあったと聞いた。

彼らは､昭和 16 年 12 月 8 日､日本軍の真珠湾奇襲によって勃発した大東亜戦争（第 2 次世界大戦）の勝利を信じ、厳しい生産ノルマ（憲兵監視）を課され、軍用機生産に従事したのである。しかし日本の勝利は線香花火のようなもので、開戦から半年後にはミッドウェー海戦（1942 年 6 月 4 日）、そして、ガダルカナル島攻防戦（同 8 月 7 日）で米国に大敗北を喫っしてしまった。以後、次々と敗退を繰り返し、昭和 19 年米戦略空軍の長距離爆撃機 B29 よる日本本土爆撃が可能なサイパン島も奪われた。

そこで昭和 20 年早々、本土空襲が始まり首都東京は勿論の事、北関東の軍需産業の拠点工場のあった太田はサイパン島から発進する B29 の空爆の標的になり徹底的に破壊されてしまった。その影響で、中島飛行機工場に近接していた生家は、米軍機の爆撃をもろに受け甚大な被害を被った。母は生家の至近距離のところで炸裂した焼夷弾かと思われる破片により重症を負った。（生家の北方は中島防衛の高射砲陣地）。幸い一命はとりとめたが、わずか位置がずれていたら即死だったろう。（避難の為、母におんぶされていた妹と抱かれていた私もやられていたかもしれない。）

このような状況下、中島飛行機の工員たちの生活は深刻だったようで、幹線道路際だった生家は表に洗濯物など干しておくとあっという間に盗られてしまったとか両親から聞いた。というのは、生家の至近距離に中島飛行機の主要な社宅や工員寮があって、生家前の道路は昼夜を問わず多数の工員達が行き交っていたそうで、両親は工員達の仕業ではなかったかと云っていた。

また、腹を空かした工員達は夜間に近隣の農家を尋ね回ってサツマイモなどの食料を調達していたようで、生家にも夜間中島飛行機の工員と名乗る人達がサツマイモなどの食料を必死になって求めにやって来たそうだ。理由を聞くと、夜勤のときにプレス機の絞油（菜種油）を屈巣ねて、天麩羅にして食べるんだと云っていたそうだ。

そこで中島飛行機の工員達は、大本営発表を聴きつつもこのような現状に鑑み、日本は長いことはないと敏感に感じとっていたのではないかと考えられる。しかし、当

時の国情を考えれば「この戦争は負ける」などと口が割けても言えなかっただろう。

そして昭和 20 年 8 月 15 日、日本はポツダム宣言を受託し、連合国に無条件降伏した。そして、その日の午後に中島飛行機は解散となり全従業員は即刻解雇され、解散した工場の設備や財産は一切封印され移動は禁じられたそうだ。（昭和 20 年 4 月 1 日、中島飛行機は第一軍需工廠となるが、会社自体は営業を休止した形になっていたという。）ところが、どうしたことか終戦前後のドサクサに紛れ門衛の目をかいくぐり設備類が中島飛行機の工場外に運び出されていたらしい。というのは生家でも、知人が旧中島飛行機から運び出したらしい機械設備や電動モーターなどの機械類を納屋に隠してやったとか父が言っていた。また、生家裏手の中島飛行機の社宅（現、国際学園）や工員寮などは大勢の工員達が去り空き家になっていたが、夜毎住宅を解体する破壊音（ギー、ギギギー）がしていたと父から聞いたことがあった。まさしく、敗戦によるドサクサに紛れて、住宅資材を運び出すためだったのであろう。このように夜中にこっそりと運び出したものを元手に会社を起業し、後々大成功を納めた輩が地元にはいたという。

降伏直後の日本の場合、無条件降伏とはいえドイツのように終戦時、無政府状態ということはなく曲がりなりにも鈴木貫太郎内閣～東久邇稔彦内閣が存在し、地方でも警察組織は機能していたようだが、警察や門衛は見て見ぬふりをしていたのだろうと父は言っていた。この人達は、まだ終戦にならない時に敗戦後の生きるすべを考えていたのである。新生日本の萌芽は敗戦（敗戦前から）と同時に逞しく始まっていたのである。また、後になってわかったことであるが、中島飛行機が米国の本土空爆を目的に開発していた 6 基の発動機を積んだ重爆撃機“富嶽”に於いても、戦争終了後は旅客機に転身させることを視野に置いていたというから驚きを禁じ得ないのである。

それから 76 年、進駐軍による会社解体（分割）をもろともせず、中島知久平の残した技術者集団を礎とする産業の拠点として、太田は復活を遂げたのである。2019 年、太田市の製造品出荷額は広島市に次いで全国 12 位（関東 4 位）と躍進している。（2021/10/24 記）

■写真下・当時の新田郡太田町に所在した中島飛行機研究所（太田の呑龍様東側）